

空



2009年

SORA 27号

箱庭(27) | 3 柴田佐知子

地曳網雲の峰より手繰り寄す

壁土で繕ふ蔵や百日紅

我慢して祭の馬となつてをり

峰雲の中ほどに吊る小鳥籠

八月や昔は布の米袋

盆花に母がおほかた隠れけり

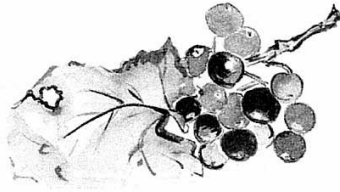
玄関を黒く塞ぎし盆の僧

鮎落ちて村もろともに山河老ゆ

空 作品抄

柴田佐知子抽出

大仰な色せめぎあふ飾り山笠	福岡	高倉和子
桜桃忌死ねるちからといふもあり	東京	中田みなみ
懺悔座の凹みて固し青葉木菟	長崎	荒井千佐代
そり返る形代の袖なだめをり	埼玉	服部早苗
収納の少し歪みて夏帽子	粕屋	秋千晴
帰省の子すこし遠慮をしてゐたり	福岡	あさなが捷
正面に国会議事堂敬老日	糸島	小林朱夏
日焼の子靴を忘れて帰りけり	須恵	苑実耶
夏川に暴れ込みたる神輿かな	うきは	高倉恵美子
暮るるまで雀の遊ぶ盆の入り	福岡	樋口みのぶ
梅干して庭がすつぱくなりにつけり	福岡	青山悠
樟若葉馬場に三的 <small>みつまと</small> のはじけ飛ぶ	熊本	田島洋子
饒舌の極みにすすめ巢立ちけり	長崎	鳳 蛮華



合歡の花戦車が富士を砲撃す

福岡 吉村 摂護

わたし掃除兄は風呂焚き昭和の日

福岡 中条 さゆり

家にこゑ忘れて来たり炎天下

羽曳野 織田 高暢

母縫ひし玉どめ小さき白縮

福岡 大地 真理

青桐の箆筒にならぬまま故郷

福岡 白水 良子

夕立のうしろに迫る下山かな

福岡 桜三 奈子

天辺は夏雲の中ピラミッド

福岡 矢野 百合子

花苔や泣き虫羅漢もう泣くな

八尾 田岡 千章

出せばすぐ猫かけのぼる網戸かな

大阪 青木 朋子

熔岩せまる一族の墓大暑来る

東京 古川 夏子

父のごと父の忌日の水を打つ

行橋 安武 晨子

舂して運動会の棒倒し

神戸 石川 叔子

ほととぎす山壁を濃く雨あがる

東京 遠山のり子

甲斐の山滴る中へ帰郷かな

福津 野畑 小百合

無花果を割れば戦時の夕べかな
福岡 ふじの茜

ゆつくりと姿見せくる梅雨の山
福岡 森 紀子

七夕や洞を照らせば古代文字
萩 岸 千手

郭公やテラスに運ぶヨーグルト
東京 今井 春生

現在地地図に確め合歡の花
東京 山田 正子

薔薇活けて客待つ家のととのへり
福岡 田代 貞枝

雨乞の山より白雨来りけり
粕屋 長 憲 一

ふくれては産着卯月の膝の上
大阪 堀江 恵子

春雷に覚め海鳴りの中にをり
鎌倉 永原 朱

梅雨晴や老いを向うに押しやりて
北九州 毎熊美智子

五線譜にやがて広がり半夏雨
福岡 犬丸 勝子

驟雨来てめだか沈みし古火鉢
福岡 亀井 紀子

登山靴劣化進んでゐたりけり
福岡 野田 美子

予報官一句を詠んで梅雨報ず
北九州 片田 きく



ほたる火も山も死にゆく父郷かな

福岡 星原悦子

夏鶯の来たる葉擦れと思ひけり

横浜 小川涼

桃すする山にガス湧く盆地かな

神奈川 及川木栄子

かじか鳴き今丑刻の江戸時計

東京 清水量子

書を売りぬブルーサルビア風に揺れ

福岡 中原俊之

いつからか蛙の鳴かぬ町に住み

福岡 川鍋明子

蟹穴に魚腸吊るし覗きをり

佐賀 堤堅策

初生りや葉陰の茄子がながながと

福岡 北原由樹

各々が自己主張して蝉しぐれ

福岡 藤田幸雄

涼しくて片付けてゐる夜の家

福岡 川崎よしみ

炎昼や妻は句会で玉碎す

福岡 亀井憲治

西瓜食べ九十二歳の胸濡らす

福岡 神谷耕輔

波打てる青田の上の山動く

宇美 内藤玲二

空作品評

大仰な色せめぎあふ飾り山笠^{やまがさ}

高倉 和子

博多人形師が技を競って作り上げる飾り山笠。今年も博多の街にいくつも立った。武者や姫の金襴の衣装、背景の色とりどりの花や流水文様。「大仰な色せめぎあふ」という表現に瞠目する。頭でだけ作ってはこうはいかない。飾り山笠を見上げ心が澄むほどに集中したものと思える。それが伝わってくる作品である。洗練された技量による見事な言葉の選択である。

収納の少し歪みて夏帽子

秋 千晴

千晴さんの目はいつも澄んでいる。真直ぐに対象を見て、素直に表現される。その作品は、すつと本質に迫り気持ちがいい。「収納の少し歪みて」はやはり鏝の広い夏帽子なればこそ。

帰省の子すこし遠慮をしてゐたり

あさなが捷苑 実耶

日焼の子靴を忘れて帰りけり

一句目。久し振りに帰ってきた故郷。最初は少しきこちないのであろう。この帰省子の気分共鳴する人は多いのではないだろうか。

二句目。子供の描写はないのだが、可愛い元気な子であろう。腕白かな？思わずにつこりしてしまう作品である。「靴を忘れて帰りけり」という事実を見落とさず作品化することでその向こうに自ずと子供が現れてくるのである。

夏川に暴れ込みたる神輿かな

高倉恵美子

「暴れ込みたる」が句の眼目である。これによって神輿が飛び出してくるような勢いと、澆漑たる臨場感がもたらされている。

梅干して庭がすつぱくなりけり 青山 悠

梅がすつぱいのは当然である。普通は一句の中にこれが並んだ時点であることはないのであるが、それをかわしているのが「庭がすつぱくなりけり」というオーバーな表現である。ここまで言い切られると常識が面白さへと変化する。

樟若葉馬場に三的^{みつまき}はじけ飛ぶ 田島 洋子

放たれた矢が三つの的に当たったのである。「はじけ飛ぶ」と季語の「樟若葉」が響きあい、句に更なる勢いを与えている。

夕立のうしろに迫る下山かな

桜 三奈子

へさつきから夕立の端にゐるらしき 飯島晴子
は端であるが、掲句は暗い空の広がりがかぐいぐいと近づいてきているのである。山であれば尚更に「迫る」の感覚が強くと、山を下る足も速くなることであろう。

郭公やテラスに運ぶヨーグルト

今井 春生

登山靴劣化進んであたりけり

野田 美子

郭公の声が聞こえるのであれば、あたりは緑も豊かな地であろう。ヨーグルトがよく似合っている。二句目の季語は「登山靴」。それにしても面白いところを詠んだものである。

春雷に覚め海鳴りの中にをり

永原 朱

春の雷は一つ二つ鳴って止むことが多い。春雷に目覚めると、そこは海鳴りが聞こえるばかりと、音から音へとつないでいる。「海鳴りの中にをり」がうまい。

梅雨晴や老いを向うに押しやりて

毎熊美智子

老いをかくも爽やかに詠む背筋の通った姿が素敵だ。尚且つたっぷりとした余裕もあり表現も巧みだ。「老いを向うに押しやりて」…この心音鬱丸に倣いたい。

予報官一句を詠んで梅雨報す

片田 きく

天気予報官はまさに季語に沿った職業といえよう。季語の話から予報へと移る様子をテレビでよく見る。「梅雨報す」との納め方がいい。

夏鶯の来たる葉擦れと思ひけり

小川 涼

声は聞こえないが、そのかそけき音は確かに生き物が立てる音なのだ。しばらく枝移りなどして鳴くこともなく飛び去ってゆくのかもしれない。静かなひと時。

熔岩せまる一族の幕大暑来る

古川 夏子

かじか鳴き今丑刻の江戸時計

清水 量子

いつからか蛙の鳴かぬ町に住み

川鍋 明子

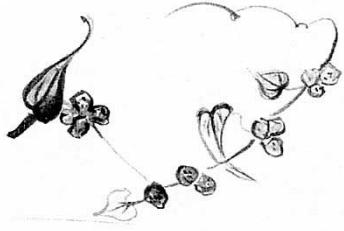
一句目。畳み掛けてくる強い言葉を受ける下五は「大暑来る」。燃えるような迫力が句を貫く。堂々たる作品である。二句目。タイムスリップしていくような不思議な感覚を呼び起こす作品である。「丑時」が効果的に使われている。三句目。以前は蛙の声も沸きあがるように聞こえていたのである。私の庭も以前はその季節になると青蛙が庭に出てきてくれた。姿を見なくなつて十年以上経ってしまった。身辺から少しずつ豊かな自然が遠のいていったのである。

夏子さん、量子さん、明子さんは今回初投句である。

空集

柴田佐知子選

花莫蔭の舟やよき名の橋くぐる
櫓の音に波のかぶさる涼み舟
火が虫を呼んでふくらむ虫簞
虫簞闇をこがしてしまひけり
神主の沓に履き替へ山開き
樟若葉馬場に三的^{みつまと}はじけ飛ぶ
万緑^{肥後線}を一氣に下り国境
熊本 田島 洋子



八方に山のめぐる青田かな
登山電車窓いつばいに夏の山
夕すげの一本ひらく山の駅
花の雲被爆校舎を遠巻きに
投函の底打つ音も朧なり
上げ潮の満ち足りしとき春の月
大瑠璃や六十余州渡り鳴き
山裾のみどり均して山法師
クローバー踏んで艇庫を出るカヌー
饒舌の極みにすずめ巢立ちけり
とろけ行く宴のあとの月下美人
プール干すプール開きを前にして
渋打つて投網の光る夏はじめ
稲植ゑて棚田は天へ駆け上る
更衣父の形見の寸足らず
真ん中に臍もつてゐる冷奴

長崎鳳
蛮華

福岡吉村撰護